

アクターネットワーク理論の進展過程

—— 物質主義志向的アクターネットワーク理論を中心に ——

大 橋 昭 一

I. 序一本稿の課題

アクターネットワーク理論は、現在でも、どのようなものかについて定義したり、説明するのが容易でないことで知られており (C3, pp.1-6)、それ故、その名が知られているわりには、内容は十分に理解されていないことが多いものといわれているが (N, p.108)、その要因の1つは、それが今日でも絶え間のない発展の過程にあり、考え方が広がって、多様なものとして進展しつづけているところにある。

アクターネットワーク理論は、周知のように、1980年代にフランスのラトゥールとカロン、イギリスのローの3人を中心に提起され、発展が試みられてきたものである。その後の発展過程については、ボエレンホルトのように、おおよそ2000年代を区切りに、それまでの段階を「第1世代理論」、その後を「第2世代理論」に分けているものもあるが (文献B1, p.112; 詳しくはΩ5参照)、アクターネットワーク理論の提唱者の1人であるローは、以下本稿で紹介するように、その発展過程を1990年代ごろをもって区切り、当時のアクターネットワーク理論をまとめて総括するとともに、ローを中心にしたこの理論の特徴を、端的には、「物質主義記号論 (material semiotics)」とというるものとしている。

ちなみに、Wikipediaの“Actor-network theory”項目の執筆者によると、現在のアクターネットワーク理論では、このローの見解が一般的なものであり、アクターネットワーク理論は一言でいえば、物質主義記号論として示されるものとしている (文献A2)。

このことは、現在のアクターネットワーク理論が、単に初期のものにくらべ、理論的により進んだ段階にあることを示すだけでなく、少なくとも内容的には物質主義記号論という方向で進んでいることを意味するが、それは、換言すれば、アクターネットワーク理論のいわば内容において、物質性 (materiality) がより重視される方向で展開が図られていることを意味する。

本稿は、こうした観点にたって、ローを中心に進められている方向を「物質主義志向的アクターネットワーク理論」としてとらえ、その進展過程について、ツーリズム論における「ツーリズム物質性論 (tourism materiality)」を含めて、レビューすることを課題とする。まずその糸口となったと思われるローらによる、アクターネットワーク理論でいう「対象 (object)」の拡張についての試みから考察を始める。

なお、参照文献は末尾に一括して記載し、典拠箇所は文献記号により本文中で示した。また、

以下本稿では、ツーリズムは日本でいう観光と同義のものであることをお断わりしておく。

II. アクターネットワークの対象の拡張論

ここでアクターネットワークの対象とよぶものは、例えば自動車でいえば、1台の自動車そのものをいう。アクターネットワーク理論によれば、自動車はかなり多くの部品、すなわち物的アクターから成り立ち、それに人的アクターが加わって、すなわち人間の運転により動くものであるが、この場合自動車は1つの対象と考えられる。

この場合旧来のアクターネットワーク理論では、対象には1つの種別しかないと考えられてきた。すなわち旧来のいわば古典的理論では、それが前提とする対象については、「対象はネットワーク (network object)」という考えしかなかった。しかしその後におけるアクターネットワーク理論の発展のなかで、対象についてはこれにとらわれず、いくつかの種別があると理解すべきことが主張されてきた。これがここでいう対象の拡張である。

先の自動車の場合でいうと、自動車は運転されて移動する。その過程は、車庫等での停止の段階、人間や物を載せる段階、走行の段階、目的地で人間や物を降ろす段階に大別される。こうした運転・移動の過程でも自動車本体のあり様(機能や部品状況)は基本的には不変であるから、アクターネットワーク理論では、通常、不変的モバイル (immutable mobile) といわれ、初期アクターネットワーク理論では、その前提とする対象は、原則的にはこうした不変的モバイルとされてきた (W, pp.5,15)。

これに対して、対象は原則としても不変的モバイルに限定されるのではないことを提起したのは、2001年のローとモルの論文(文献L6)であった。かれらは、アクターネットワーク理論が前提とする対象には場所・空間性 (spatiality) の条件において違いがあるから、場所・空間性の観点からは、アクターネットワークを一律的に不変的モバイルとすることは事態に合っていないと主張し、旧来のオーソドックスなものに加えて、「流動的 (fluid) なもの」と「火 (fire) 的なもの」の2種があると主張した。ボェレンホルトによると、ロー／モルのこの論文は、第2世代アクターネットワーク理論の出発点となる画期的なものであったが (B1, p.112)、ただしこのロー／モルの論文は、まだ場所・空間性を考察観点とする拡張論にとどまるものであった。

このロー／モルの論文に依拠して、その主張を一般化し、対象一般における相違として、体系的に整理し理論的に対象拡張論として提示したのは、ローとシングルTONの2003年の論文(文献L7)であった。結論を先にして述べると、ロー／シングルTONは、この論文において、現在の新しいアクターネットワーク理論(ポスト・アクターネットワーク理論などともいわれるもの)では、これまでの対象に加えて、「流動的 (fluid) な対象」と「火 (fire) 的な対象」の2種があると考えられるべきものであるという主張を提起した。

以下本稿ではこれら2つの論考を一体的統合的に理解し、対象(一般)の拡張論として、そ

の概要をレビューするものであるが、対象拡張の出発点になった旧来的な考え方では、さらに突き詰めてゆくと、「地域もしくは特定量 (region or volumes)」を対象とするいわば常識論的な考え方がまずあり、その普遍性を否定するものとして初期のアクターネットワーク理論により「(純然たる) ネットワーク」が対象として提起された。そしてそのうえにたつてさらに、いわゆる新しい理論において「流動的なもの」と「火的なもの」が付け加えられたものであるとまとめられる。以下ではこうした観点にたつて、これら4者について考察する。

(1) 地域もしくは特定量

これは、1つの単位を成している地域もしくは特定量を、(アクターの協働体としても)1つの単位・対象と考えるもので、もともと常識的にはあったものであり、アクターネットワーク理論でも最初の前提とされていたものはこうしたものである。それは一言でいえば、アクターネットワークのあり様が、なんらかの研究室や実験施設を前提として、そのなかで進行する過程をとにかくネットワークといえる過程であるとして究明対象としていたものである。

ロー／モルによると、こうした研究は確かに単なる「理論としての科学 (science in theory)」を基準としたものではなく、何よりも「実践における科学 (science in practice)」を目指したものである。そうした「実験室の研究 (laboratory studies)」は、特定の仮説を前提としたところの、その妥当性いかんだけを目指したものではなかった(そうした研究ではアクターネットワーク理論がそもそも念頭においているイノベーション研究などはできない……大橋)。しかしこのことは、反面、こうした研究では、その理論や方法が特定の科学的理論をバックボーンとしていることを否定するうえにたつたものであったがために、論理的にもその研究・科学はローカル性とは無縁のもの (nonlocalisable) である。すなわち普遍性をもつ (universal) と強弁されるものとなった。

しかし、こうした普遍性があるものという主張は、ロー／モルによると、「そうした科学的知見や理論は特定の場所 (location) においてなされたものであり、その意味では地域的なものであって、普遍的なものということはできない、という強い批判を受けてきたものである」(L6, p.610)。これは、本稿筆者の見解では、純粋な実験室研究といわれるものは、基本的には、いわば基礎研究段階のものであって、実際の適用にはそれぞれの特定ケースを前提とした(ローカル的な)応用研究もしくは臨床研究が必要ということの意味するものであったと考えられる。

(2) ネットワーク

これは対象を人的アクターもしくは物的アクター、あるいは両者より成るネットワークとしてとらえるもので、初期アクターネットワーク理論では通例的なものであったばかりか、アクターネットワーク理論の理論的画期性を示したとされてきたものであった。例えば原理的には、前記の不変的モバイル論の基礎となってきたものである。これに対してロー／モルは、対象という観点からみると、この段階で措定されていたネットワークには次の2点で限界があるもの

であったと指摘している。

すなわちそれには、一方において、「その対象には各部分（アクター）が特定な関係で結び付きネットワークを形成している」ものという意味があるとともに、他方では、「場所・空間性の1つの形（a form）」を成しているという意味があるものであった。故にここでいうネットワークは、一言でいえば、「一定のネットワーク的場所・空間性のなかにある安定的な形態」、つまり固定的なものという意味を含んだものであった。これが、旧来理論では不変的モバイルと表現され、モバイルしつつもネットワークとして普遍性を保つものという点に力点が置かれるものとなってきたのである。

ロー／モルによると、それ故これは「場所・空間性についてより複雑な見方をとる必要がある」（L6, p.613）と批判されるものであった。さらに、これに照応してロー／シングルトンでは、それには「安定的なネットワーク関係を維持するためには努力が必要である。そうでなければ、物事はその形や特色を失い、本来の姿をなくすことがあるものであること」（L7, pp.4-5）が充分考慮されていないと評されるものでもあった。

(3) 流動的なもの

これは、初期アクターネットワーク理論にまず付け加えられたものである。こうした考え自体は、すでに1992年アクリヒ（文献A1）により提起された流動的技術（fluid technology）にみられるものであるが（cited in L5, p.14）、ローらにとって直接的契機となったのは、アフリカ・ジンバブエにおける家庭用水ポンプの実際の使用例であった。そこではポンプは生活必需品として故障のときなどでも地元民があり合わせの品で故障を直し、とにかく水の汲み出しに使用できるようにしていたものである。汲み出した水の衛生度などは不問とされるような状態であったし、ポンプの本来の部品などが無い場合には、とにかく水の汲み出しができればよいとして、部品の代用品となる他のものが適宜使われていた。

ロー／モルによると、ジンバブエなどではこれが重宝されていた（いる）のは、何よりも故障のときなどには工夫をして、その場にあるものを利用してとにかく使用できるようになるものであったからであって、そこではポンプは本来の部品の構成を変えても使用できるものであったことが肝要なことであった。各村落で現に使用されているポンプをみると、最初はすべて同一の形状（部品の構成）であったであろうものが、実際に使用されているうちに各地のポンプごとに異なるものとなっていったのであった。

この事実のうえにたつてロー／モルは、「このようなものは（これまでの考え方では）失敗したネットワークと決めつけられるものかもしれないが、ここではポンプは、形状のうえでは可変的なものであり、これまでのタームに従っていえば、状況が異なる他の所では適宜変化が加えられて、同様な機能をなしうるところの『可変的モバイル（mutable mobile）』というべきものである」と論じ（L6, p.613: カッコ内は大橋のもの。以下同様）、こうした対象を「流動的なもの」とよんでいる。

このうえにたつて、ロー／シングルTONはこれをはっきりと「流動的対象」と規定し、こうしたポンプの例にみられる「関係の一般的流動性 (general fluidity of the relations)」こそが注目されるべきであるとともに、こうしたポンプの状況順応性は徐々に穏やかな形で行われることを必要とする。というのは急激な変化では、ポンプすなわち対象自体が全く壊れてしまい、使用不能となることが多いからであるといつげ加えている (L7, p.3)。

ちなみにこの「流動的対象」の経営理論上の実際的具体例としては、本稿筆者の見解によれば、1970年代以降一般的には盛んになったいわゆる多品種少量生産などがある。これは、真の多品種などではなく、基幹部分の大量生産と外観部分の少量生産を結合したもので、対象すなわち製品についてここでいう流動化を図ったものであると解される。

(4) 火的なもの

これは常時「あるもの (presence)」ではなく、消えて「ないもの (absence)」という状態になることがあり、「ある状態」と「ない状態」とがいわば一対 (つゝ) として存在する対象をいう。これも対象の変化であるが、前記の「流動的対象」では変化が流動的継続的プロセス的であり、穏やかで徐々に進むものであるのに対し、この「火的対象」では、変化が「火のある状態」から「火のない状態」に変わるところに見られるように、突如として瞬間的に起こるものであり、かつそれが一対 (つゝ) となっているようなものである。しかもこの場合状況の把握、すなわち火がついている状態か、消えている状態にあるかの確認は、いずれも重要であるが、消えている状態、すなわち「ない状態」についての確認・維持・管理の方がより肝要である場合が多いものである。

「火的対象」を提起したロー／モルは、この対象の特徴について次の3点を挙げている (L6, p.615ff.)。①当該形状 (shape) の継続性は、非継続性 (断絶性) の (一時的な) 結果とみるべきものである。②非継続性 (断絶性) があることは、「ある状態」と「ない状態」とが決まった関係で現れるとは限らないこと (flickering relation) に基づく。③「ある状態」と「ない状態」との関係は、後者が主導的なもので、前者のあり方は後者に依存しているという関係のもとにある。すなわち「ある状態」と「ない状態」とは、換言すれば、多くの対象では特定時点をとると、それがとりうる状態のうち、ただ1つのもののみが現に「ある状態」にあり (a single present Centre)、他の多くのものは「ない状態」にある (multiple absent Others) という関係にあるものである。

これをうけてロー／シングルTONは、この「火的対象」についても理論的検討を行い、その理論的位置づけを明らかにするよう試みているが、ロー／シングルTONによると、何よりもこれは、アクターネットワーク理論に対するこれまでの次のような批判に対して対応せんとするものという意味をもっていた (L7, p.7)。その批判とは、アクターネットワーク理論は、人的アクターと物的アクターとの違いをはじめ、種々な領域にある違いを無視している。その結果、他者 (the other) を植民地のごとく下屬したもの (colonise) として扱っているというものである。「あ

の状態」と「ない状態」の考え方は、この批判に答えようとするものであるというのである。

ちなみに、「ある状態」と「ない状態」の考え方は、すでに最近の観光学理論にも導入されている。例えばポエレンホルト(文献B1;詳しくはQ5をみられたい)は、テーマパークでは「ある状態」は開業状態をいい、「ない状態」は閉業状態をいうが、管理上でいえば後者すなわち閉業状態、つまり「ない状態」のそれが重要な意味をもつ場合が結構ある。というのは、閉業状態の管理は開業状態の準備段階であり、そのいかんにより開業状態が決まることが多いからであると論じている。

また顧客についていえば、「ない状態」にある者、すなわち「来場していない者」への配慮が肝要であり、そのためには「来場者」すなわち「ある状態」にある者に対し土産品や記念品を用意しているのと位置づけ、土産品等の理論的意味づけを試みている。また「来場していない者」は「来場者」に変わることがあるものであり、「来場者」のいわば予備軍である。

さらに、本稿筆者として最近の製造企業の製品政策に関連して考えると、意味的には今日の、例えば家庭用電気製品などが多くの機能を備え、通常は休止状態にあるが、顧客の必要に応じて機能できるようになっているのはこの例であるといえる。

(5) 対象拡張の論理

以上の対象拡張の流れは、根本的には、どのような性格のものとして理解されうるのか。これをロー／モルは、一言でいえば、「地上への降下(down to earth)」から「グローバル性のある場所・空間性(spatialities of globality)」への発展と表現している。その意味は次の点にあり、これは要するに、対象拡張についての総括的見解とみることができる。

すなわちロー／モルによると、もともと科学上の真理は、単に地球のどこでも妥当するもの、つまりグローバル的妥当性をもつだけのものではなく、それ以上の意味をもつものとして、つまりユニバーサルなものとして、すなわち神(Gods)のごときものとみられてきた。それが1970年代ごろにおきた「テクノサイエンス(technoscience)」の考え方によって、「地上への降下」がなされたが、その場所は、端的には実験室であって、そういう意味では「地域を限定されたもの」(上記の(1))であった。

これを当該地域以外にどのように広めるかという観点から登場したのが、次の(上記(2))「ネットワーク」の考え方であった。しかし地域以外に広めるには、実験室の成果は適宜コントロールされる必要があったし、そのためや、地域以外への移転のためには、それ相当の努力、すなわちコストを必要とするものであったから、移転可能ではあるが不変、という「不変的モバイル」という考えが生まれ、初期アクターネットワーク理論を象徴するタームとなった。

しかし「不変的モバイル」は、不変のままでは他所への移転・移動をモットーとするから、例えば精密な機械などでは移転先においても同じような管理や保守を必要とし、移転先の条件や状況に適応できる融通性や順応性には欠けるものが多かった。そのため、グローバルな普及と

いう点では難点が多かった。こうした観点から求められるものは、何よりもそれぞれの使用地の状況や条件に応じて弾力的流動的に順応的に使用ができるものである。

これに応えるものが(上記(3))の「流動的对象」あるいは「対象の流動化」で、そうしたものではグローバル化のためには、「不変的モバイル」は「可変的モバイル」に変わることが必要になる。というよりは、「対象の流動化」すなわち「不変的モバイルから可変的モバイルへの移行」はグローバル化から起こったと考えられるものである。

こうした点からみると、第4の対象拡張、すなわち「火的対象」は、対象のなかの機能が「使われている時」と「使われていない時」があることをいうものであり、ある場所・時において「使われていない機能」は、そこには「ないもの」つまり他者を想定しているものである。故にそれは、そこにはいない他者があることを前提としたもの(pattern of conjoined alterity)といえるし、対象の特性としては、必要な機能はすべて備えつつ、それが状況や条件に応じて点滅式に稼働したり休止したりするところの「可変的モバイル」と特徴づけることができると、ロー／モルはこの点について結論づけている(L6, p.620)。

対象拡張の問題が現在の企業経営においてもつ意義は前述したところであり、この問題は、今日における現実の企業経営に直接関連するものであるが、ここではこの問題は以上とし、次にローが以上のうえにたって、アクターネットワーク理論は、一言でいえば、物質主義記号論というべきものであるという主張を提示した2007年の論考(文献L5)をレビューする。

ここでいう記号論は、記号の意味解明を通じて社会・文化のあり方を研究するという意味のものであるが(文献C2による)、記号による表現・伝達には、伝達されたものの意味解釈をめぐって、記号の出し手と受け手の間でギャップが生まれることがある。物質主義記号論は、簡単にいえば、物資に基礎をおくことによって、認識上におけるこのギャップをなくすようにするだけでなく、何よりも記号の元となっている事柄の土台を物質自体におくようにするものである(M, pp.1-2, C2, pp.2-12)。つまり「物質主義的解釈にとどまらず、その元にある存在自体が物質主義なものになること(存在論的転換)」を要請するものである。「物質主義記号論的アクター(material-semiotic actor)」という用語自体は、すでにハラウエイにみられるといわれる(H1, p.199, cited in B2, p.2)。

Ⅲ. 物質主義記号論としてのアクターネットワーク理論の主張

(1) 物質主義記号論としてのアクターネットワーク理論の定義

ローは、この論考の冒頭において、「アクターネットワーク理論は、物質主義記号論的方法の1分野であり、かつ、社会と自然におけるすべての事柄について、それらが置かれている諸関係の網(webs of relations)のなかで絶え間なく生み出される結果とみる分析に対して感受性を持ち、その方法となる分野の1つである」と定義し(L5, p.2)、この定義に続いてアクターネットワーク・アプローチとは、次のことをいうものであるとコメントしている。

すなわち、そこでは「すべての種類のアクター、すなわち対象 (objects) と主体 (subjects), 従って人間 (human beings), 機械類 (machines), 動物類 (animals), 自然, アイデア, 組織, 異なるもの (inequalities), 規模とサイズの異なるもの (scales and sizes), そして地理的配置の異なるもの (geographical arrangements) などすべてのアクターたちが生み出され、入れ替わるものであって、このアプローチはこの諸関係における物質的、ディスコース的、異質的な諸関係に焦点を置き、それらが実演される状況 (enactment) を描くものである」というのである。さらにそのうえ、この定義には次の4点が含まれると補足している (L5, p.2ff.)。

第1に、アクターネットワーク理論は抽象的に描くことができるものではあるが、しかしそれは、本来は経験的なケーススタディに立脚したものであって、自然科学の諸方法に類似したものである。つまり、この理論は実践的行為に根ざしており、それによって発展・展開されるものであるから、上記のアクターネットワーク理論についての定義は、経験に立脚した行為が行われる場面でのみ、その妥当性を問われることがあるものである、ということである。

第2に、アクターネットワーク理論は1つの理論 (theory) というようなものではないことである。この場合理論とは、物事の起こるゆえんを説明するものという意味のものであるが、こうした観点からいうならば、アクターネットワーク理論は通常的には理論的・説明的といわれるものではなく、記述的なもの (descriptive) である。それ故それは端的には「物質主義論の形態でも興味ある物語を語る用具一式 (a toolkit for telling interesting stories) と理解されることが妥当なものであり、……より深いレベルでいえば、この世界にある関係性と物質性にかかわるものであるが、しかし整然たる姿をなしているとはいえない実践行為 (messy practices) に対する1つの感受性をなすものである」ということである。

第3に、アクターネットワーク理論といったようなもの (理論) が存在するというよりは、それは、むしろ「ディアスポラ (diaspora) (父祖の地から離れたもの)」というべきと考えられるものである。ただしこの場合この「ディアスポラ」は他の知的伝統とオーバーラップしている所があると理解されるものであることが注意されるべきである。このこともふまえたうえでいうと、アクターネットワーク理論は、名称のうえでは、アクターネットワーク理論というよりは、物質主義記号論といった方がより適しているというのである。というのは、ローによると、この名称の方がオープン性、不確実性 (uncertainty), 修正可能性 (revisability), 多様性 (diversity) をもつことを示すのに適しているからである。換言すれば、アクターネットワーク理論はドグマといったものでは毛頭なく、何よりも謙虚さ (humility) を身上とするものであるということである。

第4に、アクターネットワーク理論は特定の関係を前提としたものであって、あらゆる場面を前提とした普遍的原理たるものではないことである。すなわちローの弁によれば、「ここで論じているアクターネットワーク・アプローチと物質主義記号論はもともとある特定の様式のもとに (in a particular way) ある (だけの) ものである。……ところが、アクターネットワーク理論についてのどのようなテキストをみても、それが普遍妥当的客観性をもつものであるように

装われていることがよくある。このことは充分注意すべきである」とわざわざ注言している。

このうえにたつてローは、「1990年ごろまでのアクターネットワーク理論」と、「1995年以降の近年のアクターネットワーク理論」とに分けて、特徴を論じている。ただしローによると、ここでいう1990年は特定のなものではなく、実際には1986年から1994年ごろまでをいうものである(L5, p.7)。故に本稿では「1990年ごろまで」と表記している。そしてその後の「近年の理論」は1995年に始まるのである。

(2) 「1990年ごろまでのアクターネットワーク理論」の形成源泉

ローが「1990年ごろまでのアクターネットワーク理論」というものは、デュイムらでは「古典的(classic)アクターネットワーク理論」とよばれているものに大体相当するが(D, p.16)、ローによると、理論史的には4つの形成源泉がある(L5, p.3ff.)。

第1は、ローが「エンジニア、マネジャー、システム(engineers, managers and systems)」とよんでいるものである。その中核的な理念をなすものはシステムである。これに関連してローは、物事の中核をなすものがシステムであることをまず認識したのは、エンジニア、マネジャー(経営者・管理者)たちであったとし、ヒューズ(文献H2)に依拠し、このことをすでに1870年代～1880代に見抜き、この原理に基づき各種の事業に成功したのが、トーマス・エジソンであったとしている(cited in L5, p.3)。

ローによると、ヒューズは事業成功の鍵となるものは、システムの構成いかん(architecture of the system)であり、それは、その個々の要素、すなわち人的なものも物的なものも、このシステムの構成に従うものとなっていることはいかに依存するものであることを力説した。このうえにたつてローは、「社会的および物的な多様なシステムには脆弱性(fragility)と頑固性(obduracy)があるが、それに基づいてシステムはいかに描写されることができるか」という問題が、とりわけカロンにより提起され、これがアクターネットワーク理論として体系化されたのであると位置づけ、従ってこれがアクターネットワーク理論の第1の形成源泉をなすものであるとしている。

第2は、ローが「例示と実験室実践(exemplars and laboratory practices)」とよんでいるものである。この源流となったものは、クーンのパラダイム論であった。それは、結局、認識論的レベルにおけるものであったが、クーンの所説は「例示的ケーススタディ(exemplary case studies)」というべきものであったが故に、この流れのうえに1970年代中葉になって、ラトゥールによって実験室におけるケーススタディ論として提起されるきっかけになった。

それは端的には、この世にあるものは漠然としたもの(vague)であり、かつ、社会的なものだけではなく、物的なもの自然のものを含めて、すべてのものが事柄の進展に関与していることを主張するものであった。すでに1979年のラトゥールとウルガーの共著書(文献L2)は、「現実(realty)」と「現実についての知識(knowledge)」とは別物であることを指摘している。ラトゥー

ルはこの段階では、まだアクターネットワーク理論という名でこれを論じてはいなかったが、すでに「物質的に多様な諸関係は記号論的ツール (semiotic tools) で分析されうる」ことを主張していたのである (cited in L5, p.5)。

第3は、ローが「トランスレーション、秩序、非秩序 (translation, order and disorder)」とよんでいるものである。秩序・非秩序は、1974年のセーレの論考 (文献S1) に始まるものである。このなかで特に興味深いのは秩序と非秩序との関係に関する問題で、そこでは次のことが、すなわち、それぞれの秩序 (体) では秩序強化の動きが進むから、異なった秩序 (体) の間ではかえって非秩序が進展して、不確実性が高まり、両秩序 (体) 間では衝突さえおきることが指摘されている。

カロンにより提起されたトランスレーションの概念 (文献C1, 詳しくはQ5をみられたい) は、要するに、この考えを発展させたものである。トランスレーションは、もともとは別物で個別的なものであるもの同士について、相互に結合・協働しうる相を作り出すことであるから、別言すれば、「全般的均斉化 (generalised symmetry)」を実現することである。しかもこれを認識論レベルだけではなく、何よりも存在論レベルで行うことがキーポイントとなるものである。

第4は、ローが「ポスト構造論的關係性 (post-structuralist relationality)」とよんでいるものである。これは例えば、前記のトランスレーションの理論にしても、そして、そもそもアクターネットワーク理論の主張であるところの、人間協働における種々な種類の物質、すなわち物的アクターの関与という主張にしても、始原的には、ポスト構造主義の構成部分であったといえるものであり、ローはこの論考では、アクターネットワーク理論は、理論関連上は、究極的にはポスト構造主義の実践志向的バージョンといってもいいものという感じ (contextual suggestion) さえ与えるものであると書いている (L5, p.6)。

このうえにたってローは、さらに、アクターネットワークという考えは、理論形成上は、フォーコーのディスコース論や認識論を小規模に展開したもの (scaled-down) と位置づけられうるものであるとまとめている。ちなみにチャンドラーによると、記号論の主たる源泉の1つには、構造主義がある (C2, p.2)。

以上は、ローに従って、「1990年ごろまでのアクターネットワーク理論」について、その生成史を概観したものであるが、こうしてできたアクターネットワーク理論は1990年当時にはどのような特徴をもっていたものか。それを次に同じくロー (文献L5) に従って考察する。これは、換言すれば、現在のアクターネットワーク理論の始原的特色を概観するものであり、かつ、その後におけるアクターネットワーク理論の発展傾向の潜在的基盤を探究するものでもある。

(3) 「1990年ごろまでのアクターネットワーク理論」の諸特徴

こうした特徴として、ローは次の4点を挙げている (L5, p.7ff.)。

第1に、それには物質主義記号論的關係性が基礎になっていることである。物質主義記号論

としてのアクターネットワーク理論の定義・特色についてはすでに述べたが、ここではローは、その例示的ケーススタディとして、かれが行ったところの（文献L3）、往時のポルトガルによるインドとの帝国主義的取引についてのアクターネットワーク理論による分析結果を簡単に示し、一言でいえば、そこには「1990年ごろまでのアクターネットワーク理論」のすべての構成的特色、すなわち基本的な考え方・原理がはっきり認められるとしている。それは以下のようなものである（L5, p.7）。

- ① 記号論的關係性（semiotic relationality）：対象（ここではポルトガルの対インド取引）が1つのネットワークをなし、その構成諸要素がネットワーク的に相互に定義し合う関係にあることをいう。
- ② 多様性および物質性（heterogeneity and materiality）：人的アクターおよび非人的アクターとの多様なアクターがあることをいう。
- ③ プロセスとその不安定性（process and its precariousness）：それぞれの部分をなす要素はプロセス的存在となっているが、同時にそれには不安定性があり、絶対性はないことをいう。
- ④ パワーへの関心（attention to power）：ただしパワーは結果であるが、しかしそれはネットワークの形成、特に不変的モバイル（船はその1つ）の作出と関係する度合いが大である。
- ⑤ スペースとスケール（space and scale）：これはネットワークのいわば範囲を決め、ネットワーク拡大の仕方と、遠方アクターをトレースする可能性を決定する。

これらは、ローの考える「1990年ごろまでのアクターネットワーク理論」の5大基本原理とっていいものであるが、これらのうえにたってローは、これまでのアクターネットワーク理論に対し新しいことを示すものとして、次の2点を挙げている（L5, p.7）。これはローの主張の独自性を示すものである。

それは、アクターネットワークでは政治的経緯（political history）が大きく関係すること、および、特にポルトガルによるインドとの取引の場合にはポルトガル側のネットワークがいかに動いたかがキーポイントとなるという点である。ローは、この研究により、ポルトガル側のネットワークにおいて記号論的關係論からみて重要な多様性などが生まれ、それがこうした取引の推進で大きな役割を果たしたことが明らかになったと述べている。少なくともここには、1つの国の対植民地（的）な国との取引のような大規模な事態についてもアクターネットワーク理論は有用であることが示されている。

第2に、基礎的視点の崩壊（erosion of foundation）が起きていることである。ここで基礎的視点というのは、旧来の社会諸科学にみられたところの、人間（アクター）を物質（アクター）よりも上位にあるとすること、従って人間と物質との分離という二元論をとることをいうものであり、この二元論により、例えば人間には記号論は妥当しないとされるから（non-semiotic approach）、基礎的視点の崩壊はそうしたアプローチの妥当性否定に至るものである。

それ故、基礎的視点の崩壊は、協働における物的アクターの重要性向上をもたらすものでは

あるが、しかし、人的アクターとしての人間の役割を否定したり貶置するものでない。人間についてはその役割を過大視することを否定（崩壊）するだけのものである。そこで、物事、特に社会的現象を説明する出発点（基礎）として、例えばミクロとマクロの区別や、階級、国民国家、家父長制などを措定することは実際的ではないということになり、こうした方法は否定される。このことは、ローはじめアクターネットワーク論者に共通するものであるが^(Q4.5参照)、かれらによれば、これらの階級や国家というものはあくまでも結果たるものである。結果として存在自体が否定されることはないが、それらが説明の基礎・出発点になることは否定される。このことは、アクターネットワーク理論の絶対的根本原理である。

この点についてロー自身は次のように書いている。「アクターネットワーク・物質主義記号論は、こうしたもの（階級や国家等）がいかにして（how）生まれてきたかを究明するものであって、こうしたものが説明の土台（出発点）としては否定される世界（non-foundational world）では、神聖なものは何もなく、不変・不動なものは何もない社会が前提になる」。しかし、現実にはそうした不変・不動なものが存在している。それは何故か。ローによると、それは次の3つの継続性（durability）もしくは安定性（stability）がオーバーラップ的に作用しているからである（L5, p.9）。

- ① 物質主義的継続性：物（物的アクター）は通常人的アクターよりも発揮する力が強く、そのうえ何よりも持続的で継続的である。例えば人間を含め事物を拘束しておくには、なんらかの物的手段でそうする方が持続的で間違いない。
- ② 戦略的継続性：ポルトガルの全世界的な帝国主義的交易では、1つの領域で得られた戦略的有益性が他領域でも適用・応用され、全世界的制覇をもたらしたように、少なくとも成功の戦略は時間的空間的に他領域に応用され拡大されて継続性をもつことになる。
- ③ ディスコース的（discursive）安定性：例えば企業などの組織では永続的存続性確保のために経営者や指揮者が部下の統率に際し、カリスマ的なアントレプレナーのディスコースをとる時もあるし、官僚的なディスコースをとる時もある。前者は当該組織にのみ独自のものとして作用することが多いが、しかし他の組織や領域にも応用されることがある。後者はもともとどの組織でも妥当する普遍的なものとして作用し、継続性を発揮する。通常的な組織ではこうして継続性・安定性が確保されることが多い。

ローはこのうえにたって、反応・対応の状況（responses and reaction）について考察し、アクターネットワークとして進んできた途は、原理的にいえば、一元論的なもの（monotheistic）ではなく、とにかく多元論的なもの（polytheistic）であったと総括し、最後に「1995年以降のものといわれるアクターネットワーク理論」について、その特色的大要を提示している（L5, p.9ff.）。それは既述のように、一言でいえば「ディアスポラ化した理論」と特徴づけられるものであるが、しかし根本は、何よりも物質主義記号論たるものである。この根本のうえで、それはどのような特色をもつものであろうか。本稿では次にその大要をレビューする。

(4) 「1995年以降の近年のアクターネットワーク理論」の特色

ローが「1995年以降の近年のアクターネットワーク理論」というものは、既述のように、端的には物質主義記号論とよばれるのが適当なものであるが、その特色は次の諸点にあるとされている (L5, p.12ff.)。

第1は、実際の実践性 (performativity; enactment) である。この点についてローは、経済学に例を求め、例えば新古典学派のようなものは実際上実行不可能な市場条件を前提とする非現実的なもので、実践的有用性がないと指摘し、今日現実に必要なことは、このような純粋な物、あるいは完全なものを作り上げるのではなく、「実に異質なことから成る現実の社会において、相互に関係し合いながら部分として機能しているものの実際の姿を明らかにすることである」と規定している。

すなわち経済事象についていえば、「売り手、買い手、関係諸機関、当該商品、(市場等の)空間的条件、経済についての(関係者たちが有している)考え方、経済行為のルールなど、すべてのものの集まり (all of these assemble and together) が演じるワンセットの実演状況 (a set of practices) がどのように行われているかを明らかにすることであるが、それは多かれ少なかれ不確定な現実 (precarious reality) をなすものである」ことを承知しておくことが肝要であるというのである。

第2は、多種多様性 (multiplicity) である。この観点自体は、かねてからアクターネットワーク理論の特徴の1つとして掲げられてきたものであり、「1990年ごろまでのアクターネットワーク理論」ですでに強調されていたものである。「1995年以降の近年のアクターネットワーク理論」では、これを一步前進させて、「外面上あるいは外観上では相互に無関係と見えるような多種多様性も根元は1つである」ことが多いと理解されるものとなっている。前記で紹介したセーレが述べている秩序・非秩序の問題も、本質的には根元は1つで、いわば1つの本質の常習的に現れる多様な現象形態 (chronic multiplicity) とみられるものである。ただしそれらの現象形態は綿密に堅く結び合っていることがある (dovetail together) 場合もあると理解されるものである。

第3は、現実の諸要素の結び付きは多様であり、流動的と考えられることである。この考えは、すでにジンバブエにおける水汲み用ポンプの例として紹介したものであるが、ローはこの2007年の論考 (L5) では、今日必要なアクターネットワークの、特に物的アクターについていえば、それができる限り単純であり、かつ多様な状況・条件に順応できるもの (malleable) であることをいうものであるとしている。

これは、既述のように、今日では不変的モバイルよりも可変的モバイルの方が有用であることが多いことを主張するものであり、ローはこの論考では、「物質主義記号論は単一の (a single) ネットワークを想定しているものではない。確かに『1990年ごろまでのアクターネットワーク理論』ではこのことが前提であり、かつ中核的理念となっていたが、『1995年以降の近年のアクターネットワーク理論』はそれから発展・転化しているのである」と特徴づけてい

る (L5, p.15)。

第4は、「現実と善 (reality and goods)」と名づけられているもので、内容的には現実のオーバーラップ性と、現実については善悪の判断を伴うと考えるべきであることをいうものである。ここでローは、ケニアの有名なアンボセリ国立公園における自然的な植物の成育問題と、象の保護措置による不均等な繁殖傾向を例にだしている。つまり、象の不均等な繁殖により当地の植物が食われ過ぎになり、生育が不十分になる矛盾である。ローは「この2つの現実、自然的なもの、社会的なもの、さらに政治的なものという異質的なものが結び合って実践されねばならないものであり、……さらに最も重要なことは、そこには規範もしくは道徳 (normative or moral) の問題があることである」と論じ、そしてこの善悪の判断の必要性を認める (認めなくてはならない) 点において「物質主義記号論的感受性が起き、それが (これまでのアクターネットワーク理論からの) ディアスポラ (分離・分化) を不可欠とさせるのである」と規定している (L5, pp.15-16)。

前記で一言したように、ローによると、「1995年以降の近年のアクターネットワーク理論」は、「ディアスポラ化したアクターネットワーク理論」としても特徴づけられるものであるが、近年のアクターネットワーク理論を「ディアスポラ化したアクターネットワーク理論」と位置づけさせる直接の契機となっているものは、善悪の判断を理論の不可欠な構成要素として認めるところにあるのである。ディアスポラはこのことによって起きたのである。ローはこの項の最後の所で「善悪 (の判断保持)、(単なる) 知識の所有や現実 (の状況の把握) にとどまらず、それらすべてが共に実践されることが肝要である」と結んでいる (L5, p.16)。

第5は、ローが存在論的政治 (ontological politics) とよんでいるものである (L5, pp.16-17)。これは、内容的には、前記で紹介した善悪・倫理の問題である。ローはこの項の冒頭において「われわれの考え方は、現実に働きかけ、その善悪、正邪 (the right and the wrong) の判断に働きかけることを含むものである」と宣し、このことは「すでに『1990年ごろまでのアクターネットワーク理論』に含まれていたが、しかし実際の実践に際しては忘れられることがあっただけである」と述べている。

このいわゆる価値判断の容認・推進にとって象徴的な言葉に、例えば「われわれは無関心ではいられない (non-innocence)」というものがある。この言葉は、すでに1990年代ハラウエイ (文献H1) などにより主張され (cited in L5, p.16), 「われわれはどのような現実を作るべきか」が論じられてきたが、しかし一般に認められた解決策についての合意はできてこなかった。

この状況に対しローは、「(これまでの) 種々な考え方の間に違いがあることも重要であるが、類似性があることも同様に重要である。新しい物質主義記号論では、社会的理論の内容は、善悪に対し実践的であって、無関心であってはならないことを強調するものである」と述べ、続いてさらに (ローが唱える) 「関係論的記号論的ディアスポラ (relational semiotic diaspora) は、現実には善悪が埋め込まれているとするものであり、……現実を語ることは常に倫理にかかわった行

為であると考えられるものである。しかも善と現実とは必然的に結び付いているものではない。しかし、(現実を)破壊するだけでいいのでない。それは些細なことである。故に結論として絶対的にいえることは、われわれは現実と善との双方に対し同時に責任があるということである。このことが、『ディアスポラ化された物質主義記号論 (アクターネットワーク理論)』に課せられている課題である」(L5, p.17) と述べ、結論としている。

この場合ローは、この倫理的変革は、単に認識論上の問題ではなく、何よりも存在論上の問題としているので、現実そのものの変革が課題になると言っているのである。すなわち、これまでのアクターネットワーク理論が現実の説明のみにとどまっていたのに対し、まさに現実の倫理的変革を唱えているのである。これこそは、アクターネットワーク理論におけるディアスポラの転回というべきものである。

ローの所説は以上とし、次に、こうした最新の物質主義アクターネットワーク理論にヒントを得て、物質主義志向的ツーリズム論を展開しているリスボン大学・シモニ (文献S2) の2012年の論考を取り上げたい。

IV. ツーリズム物質性論の主張

シモニの所説で出発点になっているのは、次の諸点である (S2, p.60ff.)。

第1に、今日のツーリズム論では物質性あるいは物質主義が、単に認識論上の考察観点になるのではなく、存在論上の原理となるが必要になっているということである。このことはツーリズム論の対象等の検討にあたっては、物質主義の観点からそれを見るというレベルにとどまることなく、それが物質主義的な存在となっているかどうかのレベルで検討することをいうのであって、簡単には既述のように存在論的転換といわれるものである。つまりシモニによると、ツーリズム論でも現代アクターネットワーク理論に立脚する場合には、何よりもこうした転換を必要とする。

この点に関しシモニは、アクターネットワーク理論の創始者の一人であるラトゥール (文献L1) が、「現実のもの (reality)」と「作り上げられたもの (constructed) すなわち人工的なもの (artificial)」とを区別するのは誤っていると述べているところを引用し (cited in S2, p.60), 「すべての現実は今や作り上げられたものであるから、作り上げられていることと現実とは1つのダイナミックな存在として、一体化しているものと考えらるべきである」と規定している。

第2に、ツーリズム事業やツーリズム論では、これまでややもすると、外観の見映え (visual) や象徴的なもの、つまり代表的なもの (representational) を過度に重視し、その土台となっている物的次元 (embodied and material dimensions) は軽視される傾向にあったが、今やアクターネットワーク理論の近年の知見・見解をふまえて、「ツーリズム領域における物質性についてより深い意味を重視するアプローチ」がとられるべきであると主張する。

すなわちツーリズムでは、いわゆる観光資源などの対象 (object) は、これまでの多くの論者にみられたように、単なるまなざし (gaze) や解釈 (interpretation) の問題としてのみとらえられるようなことはしないで、何よりもツーリズムを担っている人的および物的なエージェントの働きとして考えるべきものであると、シモニは力説するのである (S2, p.61)。

それ故第3に、シモニは、ツーリズムでは継続性 (durability) が肝要であるが、それを決定するのは物質性であるとし、物質性のいかんがツーリズムのあり方を決定し、ツーリズム客の一時的なまなざしや話題 (ディスコース) などを超えて決定力をもつものになると論じている。それ故、これまでのように「まなざしやディスコースなどに重点をおいた考え方」は妥当性がなく、「物質自体のあり方が決定的な役割を果たすというアプローチ」に転換する必要があるという (S2, p.62)。

ただしその場合次の点に注意されるべきである。これが第4点である。それは物 (質) は、人間と異なって、サイレントであることである。シモニによるとここに、これまでの社会科学的ツーリズム研究において物的なものが過小評価されたり、無視されてきた理由がある。これまでの、少なくとも多くのツーリズム研究では、物的なものは、人的アクターと並ぶ物的アクターとしては認められてこなかったというのである。

換言すれば、これまでのツーリズム論では、ラトゥールが提起した用語でいえば、物的なものすべてインターメディアリ (intermediary) と考えられ、メディエーター (mediator) としては扱われてこなかった。インターメディアリとは、通常の場合の空気のようにその場に必要ではあるが、ツーリズムのその場その場の実践内容を直接左右することがないものである。これに対しメディエーターは、そうではないところの、その場その場の実践内容を直接左右するものである (この点について詳しくはΩ4をみられたい)。

さらに、物的アクターは所定のツーリズム対象にトランスレーション (協働実践化への導入・適応) され、秩序化 (ordering) されたものとして存在することが必要である。これが第5点である。それ故物的性は秩序性に組み込まれたものとしてはじめて有用性をもつ。これは、ツーリズムでは、ツーリズム行為の全体が、通常はいくつかの業種にわたって遂行されるシステムの関係にあることから来るものであり (この点について詳しくはΩ1, 116頁以下をみられたい)、ツーリズムにおける重要なモメントである。シモニは「ツーリズムでは、秩序性に従うことによって、物質性が一定の現実に取り込まれたものになる」と書いている (S2, p.63)。

そのうえにたってロー/モルやロー/シングルトンによって提起されている、既述の対象の「ある状態」と「ない状態」の考え方に触れ、それは異なった現実の間の区別をどのようなものと位置づけるかにおいて有用なものであり、この観点からいえば、それによって「常時あるもの」と「常時あるのではないもの」との区別が理論化され、ツーリズム論でも実に有用な概念であると評価している。換言すれば、「常時あるもの」は内部化 (internalize) されているもの、あるいはその必要があるものであり、「常時あるのではないもの」は外部化 (externalize) されて

いるもの、あるいは外部化されうるものを示し、この概念は両者の理論的関連を明らかにするものであって、ツーリズムの事業経営上でも実に有用なものであると位置づけている。

以上のうえにたつてシモニは、キューバへのツーリズムにおけるシガー（葉巻タバコ）の占める地位についてケーススタディ的にその特性を明らかにし、そのうえにたつて現代ツーリズム論における物質性の意義についてさらに補足的に次の諸点を付加している（S2, p.72ff.）。

第1に、現代キューバでは、社会主義体制のもと、シガーも建前としては国家的コントロールのもとにあるが、実際にはその枠外で流通しているものもある。それ故ツーリズムの各要素、とりわけ物的なものについては、それを単なる「事実マター（matter of fact）」として扱うのではなく、「関心マター（matter of concern）」として扱うことが肝要であると指摘している。

ちなみに、事実マターと関心マターとの区別はすでに初期アクターネットワーク理論で強調されているものであるが（例えばL1, p.114ff.; 詳しくはΩ4をみられたい）、シモニは、この点についてもその後における最新の理論内容をふまえて、存在論的転換が必要であるとして、これについては、多種多様性を含めて、単に物事や事柄の見方の違いとしてではなく、物事それ自体（property of things）にある違いとして認識すべきことを重ねて強調している。

第2には、このケーススタディからも、ツーリズムは今日のアクターネットワークにおける物質性の重要な意義を検出できる実に豊かな分野であることが明らかになったということであるが、このことは、逆にいえば、現在のアクターネットワーク理論は物質性に重点をおくべきものであることが、何よりもツーリズム研究において明らかになることを主張しているものと解される。

シモニはこれをふまえて、「ツーリズムによって新しいものや非日常的なものを見たり知ったりする欲求や好奇心が、ツーリズム客のいかんに応じて選択的にみたされ、実現されたものとなるが、その際この価値創造（value creation）のプロセスを統合する中心的機能を果たすものは物質性である。……ツーリズムこそは事物（things）によって機能させられ、秩序あるものとなるものであるが、それは、まさにツーリズムにおいてそうした事物が豊富にあるだけではなく、事物が関心・注目の焦点になり、それによって『人間は事物を通して考えるもの』であることが実現させられるからである。ここにおいて人間が事物と結び付く際の仕方（modes of connection）が明らかになる」と述べている。そしてこのことの基礎になっているものとして、シモニは「ツーリズム物質性」という概念を改めて提示している（S2, p.73）。

ツーリズム物質性、すなわちツーリズムは物的なものが中心的地位を占めるものであることが、キューバへのツーリズムではシガーに象徴的にみられたのであるが、これは、例えば日本の温泉観光地でいえば、温泉に示されるものである。温泉観光地は、温泉が枯渇するようなことがあれば、観光地としての存在価値もなくなる。

ただし上記のように、ツーリズム物質性はあくまでも秩序性、すなわちツーリズム秩序性（tourism ordering）のもとにあって有効性を発揮しうるものであることが看過されてはならない。

秩序性によって、人間を含めて事物が結び付き、本来の有効性を発揮しうる。秩序性のもとにおいて事物は「ある状態」にもなるし、「ない状態」にもなる。

故にシモニによると、ツーリズムでは「1つの対象（例えばあるツーリズム目的地）を構成するところの、『あるもの』と『ないもの』との存在パターンのいかんにより多様な方向性のなかで進むべき途（multidirectional path）が決まる。この場合その方向性の多様性は、『あるもの』と『ないもの』との間における生産的相互作用（generative interplay）から可能になるものである」と総括される（s2, p.76）。これが、シモニの場合、現在におけるアクターネットワーク理論に立脚したツーリズム物質性の意義を示す端的な命題である。

V. 結—小括と若干のコメント

以上本稿では、アクターネットワーク理論の物質主義志向的理論について、近年における対象の拡張論から始め、ローの物質主義記号論の概要を考察し、さらにそうした物質主義志向的アクターネットワーク理論のツーリズム研究への適用例として、シモニのツーリズム物質性論をレビューした。近年におけるいわゆる「ポスト・アクターネットワーク理論」のツーリズム研究への適用に関する原理的な問題は、別拙稿（Ω5）で論究しているのだから、それを見ていただきたい。本稿はそれに続く物質主義志向的理論に特化した1章という位置づけのものである。

本稿筆者のみるところ、物質主義志向的アクターネットワーク理論は、人間協働あるいは人間活動の物的基礎についての社会科学的解明を目指すものであるが、一言でいえば、マルクス主義経済理論・唯物史観において生産諸力といわれるものについて、そのなかでも物的生産手段の実際的なあり様についての解明を目指すものであるといえる。そうであるが故に、マルクス主義経済理論からは、経済理論は本来、生産諸力のうえにたつ生産関係の研究から出発すべきものであるという批判を受けるものであった。

しかし、いうまでもないことであるが、人間の行為、特に物の生産・流通・消費に関しては物を除外してこれを論じることはできない。経済理論は、一般的に言えば、確かに物的なものが人間行為の土台であることから出発する。この場合、経済領域は直接的には人間行為にかかわるものであるから、経済理論は直接的には人間行為の解明を目指すものとなるが、しかし人間行為の土台となるものは物的領域の問題であるから、物的なものの解明により人間行為は解明されうるという考え方にたつものと解されるが、このことを十分に認めたいうえにおいても、その土台である物的領域自体についての社会科学研究が疎かにされてもいいということにはならないと考える。

特にツーリズムの研究ではそうであって、ツーリズムは非日常性の追求であるといわれる場合においても、非日常性を構成する主要部分あるいは中核的部分は、物にかかわる領域である。やや極論的にいえば、ツーリズムに求められる非日常性は、何よりも物的非日常性である。既

述のように、温泉観光地では温泉が枯渇すれば、観光地ではなくなる恐れがある。観光地（最近盛行のクルーズ・ツーリズムによるそれを含めて）の競争は、結局は、観光地が提供しうる物の競争である。

こうした意味でいえば、ツーリズムは物のツーリズム的価値、すなわち一種の社会的価値を高める行為であるといえる。本稿本文で紹介しているように、シモニはツーリズムを価値創造的行為（の1つ）として位置づけており、同論文収録編著の3編者、デュイム／レン／ヨハネソンも、その共著の基調論文（文献D,p.7）において、「ツーリズム物質性志向的アクターネットワーク理論はとりわけ生産的なもの（productive）である」と特徴づけている。

ここでいわれている「価値創造」とか「生産的」という言葉は、いうまでもなく、マルクス主義経済理論でいう意味とは異なるものである。しかし純然たる消費過程であるツーリズムの社会的意義解明には、マルクス主義経済理論とは異なる次元の価値概念・価値論が必要とされるのではないかと（この点についてはさらにΩ1, 20-29頁もみられたい）。

この点からも興味深いことは、ローが2007年の論考（L5）において、アクターネットワーク理論は積極的に価値判断をなすべきであると主張していることである。この場合の「価値」は、前記の生産過程を価値創造過程とみるという場合の「価値」とは、全く次元の異なるものであることは論をまたないが、しかし結局、「価値」は「値打ちあるもの」という意味では基底的には共通するものがあるのではないかと。今日ではこうした基底次元から再構成された「価値」概念が必要であるように思われる。しかしその本格的理論展開は後日の課題とさせていただく。

ただし、ローによる価値判断の容認・推進の主張は、今1つの観点から大いに注目されるものである。それは、現在世界的に台頭しつつあり、注目の的となっているトランスモダン（トランスモダニティ等と同義）の主張との関連において、少なくともローらの主張するアクターネットワーク理論をどのように位置づけるかという問題である。トランスモダンの主張について詳しくは拙別稿（Ω2,3）をみていただきたいが、トランスモダン論の象徴的スローガンの主張は、何よりもポストモダン批判にある。ポストモダン思想を現在の社会・人間を蝕む悪しき商業主義の根源として、それを批判・糾弾・排撃することを主柱とする。

それ故、トランスモダン論は必然的に、なんらかの形における今日の現実（トランスモダン論によればポストモダンの現実）に対する批判を内包し、理論的には現実に対する価値判断、規範的主張、端的には道徳的批判を含むもの、少なくともそれを可とするものであることを何よりも特徴とする。しかし他方において、トランスモダン論の現況をみると、最近におけるトランスモダン論の動向をまとめたアテルイエヴィック（文献A3：詳しくはΩ3をみられたい）によると、トランスモダン論も実に多様で、トランスモダン論と名乗っているものもあれば、トランスモダン論と名乗ってはいないが、理論の内容や性格などからみて、トランスモダン論に含まれるものもある、という状況にある。

アクターネットワーク理論のポストモダン論もしくはトランスモダン論に対する関連について

てみると、拙別稿(Ω4)で紹介しているように、少なくともアクターネットワーク理論を代表する創始者の1人であるラトゥールは次のように、すなわち、アクターネットワーク理論はポストモダン論と混同されることが多いが、ポストモダン論とは原理的に別のものであると明記している。本稿筆者は、すでにこのラトゥールの所説を紹介し、そこでは確かにトランスモダンという言葉も使用されていないし、何よりもトランスモダン論一般にみられる規範的主張がないものではあるが、アテルイエヴィックのトランスモダン論の範囲についての規定からみれば、アクターネットワーク理論は極めて広い意味におけるトランスモダン論の1つとして位置づけられうるものであるということを仮説的に提起している。

この点についてみると、ローは、既述のように、アクターネットワーク理論は積極的に現実批判、価値判断を行い、推進すべきものと力説している。ローの所論でもトランスモダンという言葉はみられないが、トランスモダン論の広い意味においてその一翼を担うものとみていいと思われることを、ここに改めて確認できるものとする。

マルクス主義との関連に戻り、一言補足しておきたい。記号論(そのもの)の入門的論説を書いているチャンドラー(文献C2, p.2)は「現代記号論は、マルクス主義でもイデオロギーの役割を重視する考え方のもとは協力し合う(allied)ことがあるものである」と述べているが、物質主義記号論というレベルではこの協力はさらに進みうるものではないかと思う。物質主義記号論は意味的には唯物論記号論とも訳出できる。用語のうえでいえばローは、別拙稿(Ω5)で紹介しているように、物質性・秩序性・多種多様性を指導原理とするアクターネットワーク理論を、1992年の論考(L4, p.389)では“relational materialism(関係的唯物論)”とよんでいる。

参考文献

- A1: Akrich, M. (1992), The De-scription of Technical Objects, in: Bijker, W. E. and Law, J. (eds.), *Shaping Technology, Building Society: Studies in Sociotechnical Change*, MIT Press, pp. 205-224.
- A2: Actor-network Theory, Wikipedia: the Free Encyclopedia: retrieved July 20, 2014.
- A3: Ateljevic, I. (2013), Visions of Transmodernity: A New Renaissance of Our Human History? *Integral Review*, vol.9, pp. 200-219.
- B1: Børenholdt, J. O. (2012), Enacting Destinations: The Politics of Absence and Presence, in: van der Duim, R., Ren, C. and Jóhannesson, G. (eds.), *Actor-network Theory and Tourism: Ordering, Materiality and Multiplicity*, London: Routledge, pp. 111-127.
- B2: Bolt, B. (2007), Material Thinking and the Agency of Matter, *Studies in Material Thinking*, vol.1, www: retrieved August 19, 2014, pp. 1-4.
- C1: Callon, M. (1986), Some Elements of a Sociology of Translation: Domestication of the Scallops and the Fishermen of St Brieuc Bay, first published in: Law, J. (ed.), *Power, Action and Brief; A New Sociology of Knowledge?* London: Routledge, www: retrieved April 4, 2014, pp. 1-29.
- C2: Chandler, D., Semiotics for Beginners, www: retrieved October 22, 2014, pp. 1-13.
- C3: Cressman, D. (2009), A Brief Overview of Actor-network Theory: Punctualization, Heterogeneous Engineering & Translation, www: retrieved April 4, 2014, pp. 1-16.
- D: van der Duim, R., Ren, C. and Jóhannesson, G. (eds.), *Actor-network Theory and Tourism: Ordering, Material-*

- ity and Multiplicity*, London: Routledge.
- H1: Haraway, D. J. (1991), *Situated Knowledges: the Science Question in Feminism and the Privilege of Partial Perspective*, in: Haraway, D. J. (ed.), *Simians, Cyborgs and Women: the Reinvention of Nature*, London: Free Association Books, pp.183–201.
- H2: Hughes, T. P. (1983), *Networks of Power: Electrification in Western Society, 1880–1930*, Johns Hopkins University Press.
- L1: Latour, B. (2005), *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-network-theory*, Oxford University Press.
- L2: Latour, B. and Woolgar, S. (1979), *Laboratory Life: the Social Construction of Scientific Facts*, London: Sage.
- L3: Law, J. (1986), On the Methods of Long Distance Control: Vessels, Navigation, and the Portuguese Route to India, in: Law, J. (ed.), *Power, Action and Brief: A New Sociology of Knowledge?* London: Routledge, pp. 234–263, www: retrieved April 4, 2014.
- L4: Law, J. (1992), Notes on the Theory of the Actor-Network: Ordering, Strategy and Heterogeneity, *Systems Practice*, vol.5, pp. 379–395.
- L5: Law, J. (2007), Actor Network Theory and Material Semiotics, www: retrieved April 4, 2014, pp. 1–21.
- L6: Law, J. and Mol, A. (2001), Situating Technoscience: an Inquiry into Spatialities, *Society and Space*, vol. 19, pp. 609–621.
- L7: Law, J. and Singleton, V. (2003), Object Lessons, www: retrieved April 4, 2014, pp. 1–17.
- M: Miller, A. (2010), A Material Semiotics? www: retrieved October 22, 2014, pp. 1–6.
- N: Nimmo, R. (2011), Actor-network Theory and Methodology: Social Research in a more-than-Human World, *Methodological Innovations Online*, pp.108–119, www: retrieved April 4, 2014.
- S1: Serres, M. (1974), *La Traduction, Hermes III*, Paris: Les Éditions de Minuit.
- S2: Simoni, V. (2012), Tourism Materialities: Enacting Cigars in Touristic Cuba, in: van der Duim, R., Ren, C. and Jóhannesson, G. (eds.), *Actor-network Theory and Tourism: Ordering, Materiality and Multiplicity*, London: Routledge, pp. 59–79.
- W: Watson, G. (2007), Actor Network Theory: After-ANT & Enactment: Implications for Method, www: retrieved April 4, 2014, pp. 1–49.
- Ω1: 大橋昭一 (2010) 『観光の思想と理論』 文眞堂
- Ω2: 大橋昭一 (2014a) 「トランスモダニティ論の勃興—現代の社会をどうとらえるか: その基本的一類型—」 『和歌山大学・経済理論』 376号, 103–128頁
- Ω3: 大橋昭一 (2014b) 「ポストモダンからトランスモダンへ—現代社会のとらえ方の転換点—」 『和歌山大学・観光学』 11号, 1–12頁
- Ω4: 大橋昭一 (2014c) 「今日における協働体のとらえ方—ラトウールのアクターネットワーク理論の研究—」 『和歌山大学・経済理論』 378号, 81–101頁
- Ω5: 大橋昭一 / 竹林浩志 (2015) 「観光事業論におけるアクターネットワーク理論の意義—ポスト・アクターネットワーク理論もふまえて—」 『和歌山大学・観光学』 12号, 15–25頁

Development of Actor Network Theory: A Direction based on Materiality

Shoichi OHASHI

Abstract:

According to John Law, actor network theory can be grasped as a kind of material semiotics and he urges a normative or moral standpoint too. This paper surveys the development of materiality-oriented direction, arguing that the actor network theory can in essence be incorporated into the emerging transmodern theory as a latent ingredient, given this normative assertion of Law in particular.